

I、はじめに

台湾と日本は、1895年から50年間にわたる日本統治時代があり、その間、殖民地政策の一環として、学校教育が全て日本語で行われた。それがきっかけとなり、現在80歳ほどの台湾人は日本語ができる。一方、台湾は世界で5番目に日本語教育が盛んな国だといわれている¹。学習動機には、日本のテレビ、ゲーム、歌、漫画が好き、日本への観光、留学に行きたいなどがあげられた²。

台湾には先述したような日本との歴史的な関係により、日本文化に対する潜在的な共通項が存在しており、日本事情をより見近に感じる共通概念が文化の根底で重なっているように思われる。その土台をさらに強固に、そしてそこから発展を導くために日本語教育が果たす役割は大きいものとする。現在、台湾においても、日本語教育事情の改革が各教育機関によって模索され、またその日本語教育の意義、教え方、学習者目標などの見直しが行われている。

日本語を学習する上で、漢字や語順など、学習者の国籍でその難易度が変わるものがあるが、国籍を問わず、すべての学習者が直面する壁の一つとして、動詞の分類・活用があげられる。

学習者が日本語の学習を継続すると、動詞を活用することでアスペクト表現を作ることが要求されてくる。この段階で学習者は動詞の分類と活用を知るわけだが、これは学習者にとって大変負担の大きいものである。多くの学習者にとって、動詞の分類と活用は一番分かりにくく、この段階で日本語の勉強を諦めることが多い³。

日本語教育で一般的に使われる教科書では、初級の段階から「ます形」(丁寧体)が使われることが多い。これは、学習者が実際に日本人と会話することを想定し、相手に失礼にならないよう配慮された結果だと考えられる。また、日本国内の日本語教師養成講座で日本語教師を目指す人が実習する教授法は「ます形」からの導入である。学習者が動詞の分類と活用を学習する際、我々教師側は少しでも学習者の負担が軽くなるように、さまざまな工夫をして指導する。その時問題となるのが、「辞書形」で分類・活用を導入するか、「ます形」で導入するかという点である。現在、この点を

¹ 国際交流基金(2012)「海外の日本語教育の現状—日本語教育機関調査」による。

² 蘆・王(2009)による。

³ 謝(2002)による

議論した研究は多く存在するが、実践的な研究はほとんど存在しないのが現状である。

以上のことから、活用の前提となる動詞の分類について、台湾の学習者を対象に実践的な研究を試み学習者の実際の理解度や意見をもとに、「ます形」に基づいた分類と「辞書形」に基づいた分類についての議論に1つの提案を行うことが本研究の目的である。

II、先行研究

台湾では日本語の学習者数が増えつつあるが、学習機関も大学以外に、小・中・高等学校、補習班、推广部、社区大学、楽齡教育資源中心、長青学院、救国团などある。国際交流基金の調査によって、機関数、学習者数、教師数が増加したことが示している。台湾人学習者に対する日本語教育の重要性が伺えるとともに、これからますます需要が伸びていくと考えられる。これらの点から、台湾の日本語学習者の視点で論ずることに意義があると考えられる。

台湾における日本語教育の現況としては、授業方法は文法中心や母国語中心(中国語)の授業が多く、使用教材は『みんなの日本語』が一般的に広く普及している。これは必ずしも台湾の学習者にあった教材、授業方法だとは言えず、国際交流基金(2006)の調査からも適切な教材の不足が叫ばれている。

多くの学習者にとって、動詞の分類と活用は一番分かりにくいと言われている。動詞の分類判別法については丸山(1994)や藤村(1998:41)において詳しく記載されている。また、藤村(2003:3)においても簡単にまとめられている。藤村(1998:41)では「「ます形」法」と「「辞書形」法」という言葉を用い以下のようにまとめられている。

「ます形」法

- ①「ます形」の「ます」の前の音節に「え」の母音が含まれていれば一段動詞である。
- ②「ます形」の「ます」の前の音節に「い」の母音が含まれていれば五段動詞か一段動詞である。数の上から考えて、「い」の母音を含む音節を語尾「ます」の直前に持つ一段動詞(「見ます」など)を例外的な存在として扱うことができる。

「辞書形」法

- ① 「辞書形」が「る」で終わらない動詞は五段動詞である。
- ② 「辞書形」が「る」で終わる動詞のうち「る」の前の音節が「あ／う／お」の母音を含んでいれば五段動詞である。
- ③ 「辞書形」が「る」で終わる動詞のうち「る」の前の音節が「い／え」の母音を含んでいれば一段動詞か五段動詞である。数の上から考えて、「い／え」の母音を含む音節を「る」の前に持つ五段動詞（「走る」「帰る」など）を例外的な存在として扱うことができる。

日本国内の日本語教育現場では一般的に「ます形」による分類法が採用されている。これは劉（2012）の研究でも述べられている通り、「現在日本で使用されているテキストに見られる活用の説明においては、マス形を軸においた説明が圧倒的に多い（劉：2012：17）」ことからわかる。一方で、「中国や韓国をはじめ多くの海外の日本語教育現場においては辞書形を軸にした活用の説明方法が採用されているということである（劉：2012：20）」。

「ます形」による動詞の分類と「辞書形」による動詞の分類の優劣についてはさまざまな議論がある。丸山（1994：122）は「「一ます」の前の音が「一i」のときには、1グループか2グループか判別できないということになります。（中略）極端な例として、「置きます（1グループ）」「起きます（2グループ）」、「着きます（1グループ）」「尽きます（2グループ）」のように、全く同じ音になるものさえあります。したがって「一ます」の前の音からは2グループの一部（「一eます」になるもの。すなわち下一段動詞）の判別はできるものの、グループ分けの方法としてはあまり効率的なものではないといわざるをえません」と述べている。これに対し、藤村（1998：43）は丸山（1994：122）の意見に対する反論として「同様のことは「辞書形」法にも言える。例えば、「居る」と「要る／煎る／炒る」の対立、「変える／代える／変える／替える」と「返る／帰る」の対立、（中略）などが見られる。動詞の「活用」を「ます形」ではなく「辞書形」を中心に記述する根拠が（中略）動詞分類判別法であるとすれば、この根拠はほとんどないといってよいだろう。「ます形」法を動詞分類判別法の観点からむやみに非難するのは、今後控えるべきであろう。」と述べている。また、菊池（1994、1999）、野田（1995）では「て形」導入に関して「辞書形」中心で行うべき

か、「ます形」中心で行うべきかについて議論されている。この中でも、動詞分類識別法が議論の一角となっている。

これまでの研究からは、動詞の分類を指導するにあたり「辞書形」による分類法と「ます形」による分類法のどちらを採用するべきかはっきりと示すことができない。また、これまでの研究は実践的なものではなく、実際に学習者がどのように感じているのかは反映されていない。教育は学習者主体であるべきで、教師がどのように主張したとしても、学習者にとってわかりにくいもの、負担が大きいものでは意味がない。そこで、本稿では学習者に対して「辞書形」による分類法と「ます形」による分類法を指導し、実際にどちらの指導法が学習者により定着するのか、学習者にとってどちらの分類法がわかりやすいのか、また、それぞれの分類法の利点・欠点を学習者に対して実施したテストとアンケートから考察する。

Ⅲ、現状調査

日本語教育の現場で一般的に用いられる分離法は上記の通りである。本稿でも、「ます形」による分類に関しては上記の分類法を採用する。「辞書形」による分類法に関しては、上記の分類ではなく、『平成式日本語』（謝・陳：2014）での分類法を採用する。分類法は以下の通りである。

1. 「平成式辞書形分類法」

- ①「辞書形」が漢字1字と送り仮名2字で構成される動詞のうち、語尾が「る」、「る」の前の音節が「い／え」の母音を含んでいれば一段動詞である。
(例：起きる、食べる)
- ②一段動詞の例外として、「辞書形」が漢字を含まない3文字の動詞で語尾が「る」、「る」のまえの音節が「い／え」の母音を含むもの(例：あげる)、「辞書形」が漢字を含む2文字で構成される上一段動詞(見る／居る／着る)と下一段動詞(寝る／出る)
- ③上記①②に該当しない動詞は五段動詞である。
(買う／帰る／終わる／もらう…)

「平成式辞書形分類法」の利点として、一般的に用いられる動詞の分類法よりも暗記すべき規則が少ないことである。一般的な「辞書形」による動詞分類法では①「る」

で終わらない動詞は五段動詞である、②「る」で終わる動詞のうち、「る」の前の音節が「あ／う／お」の母音を含んでいれば五段動詞、③「る」で終わる動詞のうち「る」の前の音節が「い／え」の母音を含む動詞は五段動詞か一段動詞であり、④例外として五段動詞の「い／え」を含む母音＋「る」を覚える、という4つの規則を覚えなければならないのに対し、「平成意識分類法」では①一段動詞は漢字1字と送り仮名2字で構成され、語尾が「る」、「る」の前の音節が「い／え」の母音を含んでいる、②一段動詞の例外として2音節の上一段動詞と下一段動詞、漢字を含まない「い／え」の母音＋「る」の3音節の動詞を覚える、③その他は五段動詞である、の3つの規則を覚えるだけである。また、規則の中心は一段動詞であり、一段動詞の規則を覚えれば分類が可能のため、学習者にとって単純だという印象を与えることができると考える。この理由から「平成式辞書形分類法」を採用する。

2. 調査対象と調査方法

今回、調査するにあたり、学習者は20代中心の大学の日本語クラスと、60代中心の長青学院に絞った。使用した教材は『平成式日本語（謝：2014）』である。この教科書の指導方法に基づき、学習者に分類の導入を行った。

①調査対象

本調査はある大学で日本語授業が必修科目であるAクラス、選択科目であるBクラスと、そして長青学院の学習者が60歳以上のクラス、そして大学の付属高校1年生の日本語クラスを対象に行ったものである。授業時間は1コマ50分で各クラス3コマの計150分を使い、導入・確認テスト・アンケート調査を行った。学習者の詳細は以下の通りである。

ある大学	Aクラス	学生	24名	
同上	Bクラス	学生	20名	
長青学院	Cクラス	学生	15名	
高校	Dクラス	学生	35名	計94名

学習歴として1年未満の学習者が64名、2年未満の学習者が21名、2年以上の学習者が9名であった。このうち、以前ほかの日本語教育機関で動詞の分類を学習したことがある学習者は19名であった。ほかの日本語教育機関で学習経験がある学習者

に対して、以前学習したときの動詞の分類方法について質問したところ、9名の学習者が「ます形」から、3名の学習者が「辞書形」から学習しており、5名の学習者が「覚えていない」と回答、2名無回答という答えだった。残りの75名の学習者については今回初めて動詞の分類を学習したということである。

②調査方法

本調査では動詞の分類を導入後、学習者の理解度を確認するため簡単なテストを実施した。また確認テストと同時にアンケート調査を行い、学習者の意見を調査した。これらの方法を用い、確認テストの結果とアンケート調査の結果を分類・分析し、台湾人学習者に対してどちらの導入方法がより効果的かを考察することが本調査の目的である。大まかな時間の割り振りは以下の通りである。

Aクラス

- 週1回3コマの授業で、1コマ目→ます形による分類導入～確認テスト
- 2コマ目→辞書形による分類導入～確認テスト
- 3コマ目→アンケート

Bクラス

- 週1回3コマの授業で、1コマ目→辞書形による分類導入～確認テスト
- 2コマ目→ます形による分類導入～確認テスト
- 3コマ目→アンケート

Cクラス

- 週1回2コマの授業で、一回目
 - 1コマ目→ます形による分類導入～確認テスト
 - 2アンケート
- 二回目
 - 1コマ目→辞書形による分類導入～確認テスト
 - 2コマ目→アンケート

Dクラス

- 週1回1コマの授業で、一回目
 - 1コマ目→辞書形による分類導入～確認テスト
 - 2アンケート

二回目

1 コマ目→ます形による分類導入～確認テスト

2 コマ目→アンケート

まず、1 コマ目でます形または辞書形からの動詞の分類を導入、練習し、その後確認テストを行う。2 コマ目で辞書形またはます形からの動詞の分類を導入、練習し、確認テストを行う。3 コマ目にアンケート調査を行い、それぞれの分類方法について、学習者の意見を調査するという構成である。ます形からの導入と辞書形からの導入の順序が2つの学科で違うのは、先行する知識の差で学習者の印象が変わるかどうかを確認しなかったためである。順番は違うが指導の方法は3つのクラスとも同一である。

IV、調査結果

本調査では、4つのクラスで各分類を導入後、それぞれのクラスで確認テストを行った。テスト問題は不正を防ぐため、大学の2つクラスで違う問題を使用した。長青学院、高校のクラスでのテスト問題は同じ問題である。テスト結果から各分類の定着を考察する。

1、テスト結果からの考察①（総合的な正答率から）

まず、辞書形からの分類に関して、A、B、C、Dクラスの正答率はます形からよりも高いことがわかる。そのなかで、大学生には辞書形からの分類がきちんと定着していることがわかる。差が一番著しいのはCクラスで、60歳以上の学習者にとって、辞書形からの分類が分かりやすいといえる。一方、Dクラスの高校生では2つの分類法の差が小さいことが示されている。詳細は図1の通りである。

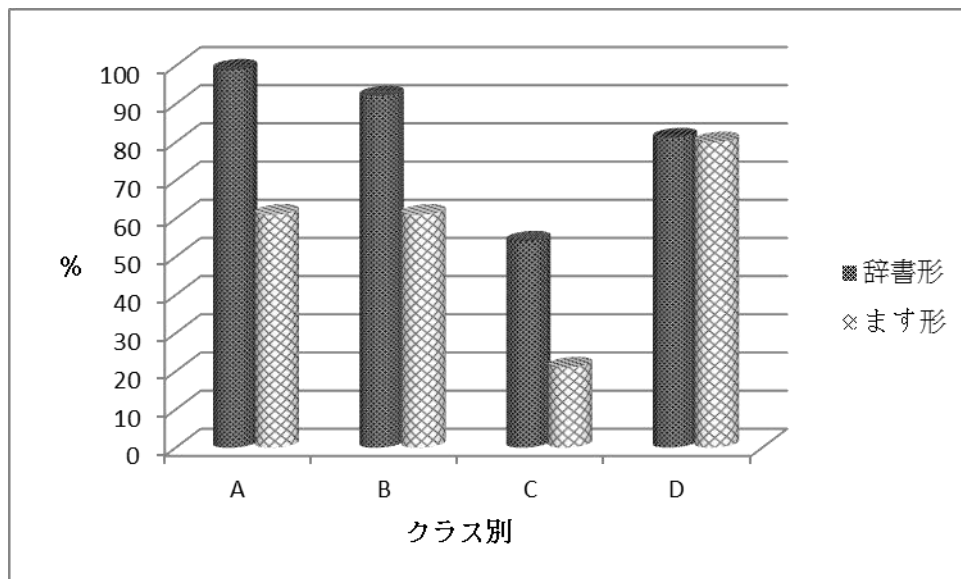


図1 各クラス正答率

出所：本調査により作成

ます形からの分類に関しては、どちらのクラスでも辞書形からの分類と比べて正答率が下がっていた。各クラスのます形からの分類の正答率度は図1の通りである。以上のことから、学習者の正答率を総合的に考察した結果、辞書形からの分類とます形からの分類では、辞書形からの分類のほうが学習者の正答率も高く、定着もいいことがわかった。

2、テスト結果からの考察（グループごとの正答率から）

次にテスト結果を動詞のグループごとに考察したい。

① グループの分類

Iグループの正答率は以下の通りである。ここで注目したいものが「貸す・貸します」と「話す・話します」の正答率だ。辞書形からの分類では「貸す」「話す」ともに正答率が高いのに対し、ます形では「貸します」「話します」ともに正答率が下がっている。誤答の詳細を確認すると、IIIグループに分類している学習者が多くみられた。IIIグループの動詞である動名詞（「勉強します」「散歩します」など）の語幹「します」とIグループである「話します」「貸します」の語尾の「します」の区別がきちんと理解できていないことがわかる。これらのことから、語幹に「します」を持つ

動詞を分類する場合、辞書形から分類のほうが学習者の誤答がなく、学習者にとって単純に分類できることがわかる。

表 1：I グループの正答者数

設問	A(24名)	B(20名)	C(15名)	D(35名)	設問	A(24名)	B(20名)	C(15名)	D(35名)
貸す	21	19	9	35	貸します	19	17	5	30
話す	21	19	9	35	話します	19	17	5	30
終わる	21	21	9	32	終わります	17	15	4	28
書く	21	21	9	35	働きます	21	15	5	35
切る	20	20	5	33	取ります	20	18	5	30
消す	21	20	9	35	入ります	20	18	4	31
言う	21	21	9	35	買います	21	17	4	30
聞く	21	20	11	35	行きます	20	17	5	28
曲がる	21	20	5	34	降ります	19	15	2	27

出所：本調査により作成

②IIグループの分類

IIグループの正答率は以下の通りである。ここで注目すべきものは、特別なIIグループの正答率である。ます形からの分類の場合、辞書形からのほうが正答率は高いことが示されている。特別なIIグループである「いる・着る・見る・寝る・出る」の正答率も高いことが分かった。一方、ます形の場合、漢字で表されていない「います・あげます」の正答率が低くなっていた。このことから、台湾の学習者は漢字で動詞を分類するという方法が一般的に見られるといえる。

辞書形とます形それぞれに特別なIIグループとして提示されている「着る：着ます」「見る・見ます」「いる・います」に注目しても、ます形からの分類の方が誤答が多いことがわかる。また、学習者の誤答を確認しても、特別なIIグループをIグループと回答している学習者が多かった。これらのことから、特別なIIグループを覚える場合、ます形からの分類ではIグループとIIグループの見分けが難しく、誤答が多くな

ってしまうと考えられる。一方、辞書形からの分類の場合、ⅠグループとⅡグループの分類の違いがはっきりしているため、誤答が少なくなったと考えられる。以上のことから、Ⅱグループの分類において、辞書形からの分類の方が有効だといえる。

表 2：Ⅱグループの正答者数

設問	A(24名)	B(20名)	C(15名)	D(35名)	設問	A(24名)	B(20名)	C(15名)	D(35名)
借りる	24	20	9	35	借ります	14	15	5	32
着る	24	20	9	35	着ます	17	15	5	32
見る	24	20	9	32	見ます	18	14	4	30
浴びる	21	17	9	35	浴びます	19	14	5	32
足りる	21	17	5	33	足ります	19	12	4	32
出る	24	15	9	35	出ます	21	12	4	30
寝る	24	13	9	35	寝ます	19	15	4	30
居る	21	15	11	35	います	16	14	2	30
起きる	24	20	5	34	起きます	13	13	4	32
あげる	24	20	8	34	あげます	21	13	4	30
教える	24	20	9	35	入れます	21	14	4	32
掛ける	24	20	10	35	食べます	21	14	4	32

出所：本調査により作成

③Ⅲグループの分類

Ⅲグループの「します」の分類については辞書形からの分類、ます形からの分類ともに差はなかった。「来る：来ます」については誤答が多かった。誤答の内訳としては辞書形からの分類の場合、Ⅲグループであるべき「来る」をⅡグループに分類していた。一方、ます形からの分類の場合、「来ます」をⅠグループに分類していた。辞書形からの分類の場合、漢字の読みがます形に引きずられ、「来る」を「きる」と誤って読んでしまい、特別なⅡグループの「着る」とも重なりⅡグループに分類してしまったのだと考えられる。ます形からの分類の場合、「ます」の前の音節に「い」が

含まれていることから、Ⅰグループに分類してしまったのだと考えられる。Ⅲグループの「来る・来ます」に関しては、辞書形からの分類、ます形からの分類ともに定着が難しいことがわかった。Ⅲグループの正答率は表3の通りである。

表3 Ⅲグループの正答者数

設問	A(24名)	B(20名)	C(15名)	D(35名)	設問	A(24名)	B(20名)	C(15名)	D(35名)
来る	23(96%)	18(90%)	12(80%)	33(94%)	来ます	20(83%)	15(75%)	5(33%)	30(86%)
する	24(100%)	19(95%)	15(100%)	34(97%)	します	22(92%)	17(85%)	9(60%)	32(91%)
勉強する	24(100%)	20(100%)	15(100%)	34(97%)	勉強します	22(92%)	19(95%)	10(67%)	32(91%)

出所：本調査により作成

3、アンケート結果からの考察

確認のテストが終わってから、アンケート調査を行った。以下ではアンケート結果をもとに、辞書形からの分類とます形からの分類について考察する。

分類方法については以下のような回答であった。総合的にどちらの分類方法がわかりやすかったかについての学習者の回答は以下の通りである。

表4：わかりやすい分類方法(総合的)

選択肢	人数 (%)
ます形	17(18%)
辞書形	64(68%)
どちらもわかりやすい	7(7%)
どちらもわかりにくい	6(6%)
合計	94(100%)

出所：本調査により作成

表4からもわかるように、全体の68%の学習者が辞書形からの分類がわかりやすいと答えている。一方ます形からの分類は18%の学習者がわかりやすいと回答した。どちらもわかりやすいは7%、どちらもわかりにくい6%だった。この結果から、

動詞の分類方法として辞書形からの導入の方が学習者にとって受け入れられやすいことがわかった。

また、辞書形からの分類とます形からの分類について総合的な意見を調査するとともに、Ⅰグループの分類は辞書形とます形どちらの方がわかりやすかったか、特別なⅡグループの分類、そしてⅢグループの分類はどちらがわかりやすかったかについても学習者に質問した。

まず、Ⅰグループの分類方法の結果は以下の表5の通りである。

表5：わかりやすい分類方法(Ⅰグループの分類)

	人数 (%)
ます形	15(16%)
辞書形	70(74%)
どちらもわかりにくい	9(10%)
どちらもわかりやすい	0 (0%)
合計	94(100%)

出所：本調査により作成

表5を見ると、やはり辞書形からの分類の方がわかりやすいと感じている学習者が多いことがわかる。ます形からの分類でわかりにくいところとして、学習者の回答にもあったように、ます形からの分類ではⅠグループとⅡグループの分類が混乱するという点が大きく関係していると考えられる。辞書形からの分類の場合、ⅠグループとⅡグループの分類がはっきりしているため、混乱は少ないようだった。

次に特別なⅡグループの分類については以下の通りである。

表 6 : わかりやすい分類方法(特別なⅡグループの分類)

	人数 (%)
ます形	11(12%)
辞書形	69(73%)
どちらもわかりにくい	9(10%)
どちらもわかりやすい	0 (0%)
合計	94(100%)

出所：本調査により作成

特別なⅡグループの分類では、辞書形からの分類がわかりやすいと答えた学習者が73%強いた。その一方でます形からの分類がわかりやすいと答えた学習者は12%程度であった。どちらもわかりやすいと答えた学習者もなく、反対に、どちらもわかりにくいと答えた学習者が約10%であった。このことから、特別なⅡグループは学習者にとってかなり負担が大きいことがわかる。

Ⅲグループの分類については以下の通りである。

表 7 : わかりやすい分類方法(Ⅲグループの分類)

	人数 (%)
ます形	23(24%)
辞書形	65(69%)
どちらもわかりにくい	2(2%)
どちらもわかりやすい	4(4%)
合計	94(100%)

出所：本調査により作成

Ⅲグループの分類では、辞書形からの分類がわかりやすいと答える学習者が69%強いたが、その一方でます形からの分類がわかりやすいと答えた学習者がⅠグループ、

Ⅱグループよりも多くなった。さらにどちらもわかりやすいと答えた学習者が4人いた。Ⅰグループ、ⅡグループよりもⅢグループのほうが差は少ないことがわかる。

V、まとめ

今回の調査から、動詞の分類について、学習者にとってかなり負担となっていることがわかる。しかし、学習者の学習意欲を上げるために、または負担を抑えるためには、教師の教授法にも工夫が必要であると思われる。

辞書形からの分類方法とます形からの分類方法について、本調査から得られた結果として、辞書形からの分類のほうが学習者の負担が軽減できるということがわかった。その理由として、①ⅠグループとⅡグループの分類が辞書形のほうが単純でわかりやすいこと、②特別なⅡグループの数が少ないということがあげられる。また、テスト結果からの考察として、辞書形からの分類とます形からの分類では、「します」を語幹に持つ動詞の分類で正答率が分かれた。辞書形からの分類では「します」を語幹に持つ動詞の正答率は100%であったのに対し、ます形からの分類では正答率が90%であった。この点からも辞書形からの分類を採用する利点があると考えられる。

しかし、辞書形からの分類として多く挙げられて回答は「例外を覚えなければならぬ」というものだった。このことから、やはり学習者にとって例外の暗記がかなり負担となっていることがわかる。また、ます形からの分類をすでに学習していた既習者にとっては辞書形からの分類は混乱するとの回答があった。また、特別なⅡグループの動詞については、辞書形からの分類の方がわかりやすいという意見が多かったが、それはます形からの分類と比べ比較的わかりやすいというレベルであり、学習者にとってはやはり負担の大きいものだと言える。

本稿では辞書形からの分類の場合、特別なⅡグループがます形からの分類よりも少ないという記述を行ったが、先行研究が示すように、特別なⅡグループに関しては、ます形からと辞書形から分類の負担はほぼ変わりがない。ただ、学習者が動詞の分類を学習する時点で、辞書形からの分類のほうがます形からの分類よりも特別なⅡグループが少ないということは事実であり、それが学習者にとって大きな意味を持つことも事実である。

教師に求められることはどれだけ学習者の負担を減らしながら、わかりやすい授業

ができるかということだと考える。その考えに立った時、動詞の分類において辞書形からの分類はます形からの分類よりも有効な方法だと考えられる。

本研究の課題として、調査対象となった学習者が94名で、台湾全体の学習者の実態も把握しきれないところがあると思われる。これから観察数を増やし、今後に残された課題としたい。また、アンケート調査を匿名性にしたためテスト結果との相互関係が確認できなかったことも課題としてあげられる。

参考文献

- 金田智子 (2006) 「学習者の学びから学ぶ—台湾調査より」、『日本語教育機関調査』
179-191
- 盧錦姬・王福順(2009) 「第二外国語としての日本語学習の動機付けと学習態度：静宜
大学・修平技術学院の学生アンケート調査を通して」、『静宜語文論叢』第2
卷第2期。117-149
- 丸山敬介 (2005) 『日本語教育演習シリーズ① 教えるためのことばの整理 Vol.1 (改
訂版) 凡人社
- 坂本正・小柳かおる・長友和彦・畑佐由紀子・村上恭子・森山進編 (2008) 『多様化
する言語習得環境とこれからの日本語教育』スリーエーネットワーク
- 斎藤明・坂根慶子 (1989) 『日本語教師ハンドブック』創拓社
- 謝凱雯・陳志坪(2014) 『平成式日本語學習』五南書局
- 藤田直也 (2000) 『日本語文法 学習者によくわかる教え方』アルク
- 藤村泰司 (1989) 「日本語教育で「辞書形」を「活用」の中心に据えるのは、なぜな
のか」、『International University of Japan Working Papers』 Vol. 9、40
～44
- 藤村泰司 (2003) 「「て形」の作り方*—「辞書形」中心派、「ます形」中心派に欠けて
いる視点—」、『International University of Japan Working Papers』 Vol. 13、
1～8
- 藤村泰司 (2004) 「動詞分類判別法*—「辞書形」法が「ます形」法より優れている一
つの理由—」、『International University of Japan Working Papers』 Vol. 14
29～35
- 劉志偉 (2012) 「初級における動詞活用の学習について：日本語学習経験者の視点か
ら提案する説明方法」、『日本語研究 (32)』 15～27
- 山口秀治 (2005) 「日本語教育における動詞の分類について」、『大分大学留学生セン
ター紀要』第2号 53～63

参考 HP

國際交流基金HP 2012年度 日本語教育機関調査 2015年7月25日 access

<https://www.jpff.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey12.html>

学生支援機構HP 平成26年度外国人留学生在籍状況調査結果 2015年7月25日

access

http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data14.html